

自己の夢をつくりあげる生き方探究教育のさらなる充実を求めて

- 人や社会とのつながりを意識した、体験的な学習の実際 -

河野 由佳

昨年度は、生き方探究教育において育てたい5領域の力の中の、「自己の夢をつくりあげる力(自己理解能力・将来設計能力)」に焦点を当て、各教科等の具体的な指導の在り方を提示した。実践授業を行うに当たっては、学習計画や学習指導案の工夫、教育相談活動や自己評価活動の場の設定を大切にした。

そこで、昨年度の研究成果を踏まえ、今年度は、各教科等の「働くこと(勤労観・職業観)」や「生きること」にかかわる教育活動に重点をおき、一人一人のキャリア発達を支援することにより、子どもたちが、自己の在り方を見つめ、生き方を考えることができるのではないかと考え、研究を進めた。

本研究では、人や社会とのつながりを意識した体験的な学習を進める上での留意点や、個に応じた働きかけを大切に具体的な指導事例を提示する。

第1章 自己の夢をつくりあげる生き方探究教育

第1節 小学校における生き方探究教育とは

将来の生き方や職業への夢・希望・あこがれをもち、よりよく生きるための資質や能力、態度の基礎を育成することに主眼をおき、小学校における生き方探究教育を進めていくことが、今、求められている。そのためには、「自己の夢をつくりあげる力」をはぐくむ八つの要素(図1)を、教育活動の中に、意図的に組み入れていくことが大切になる。

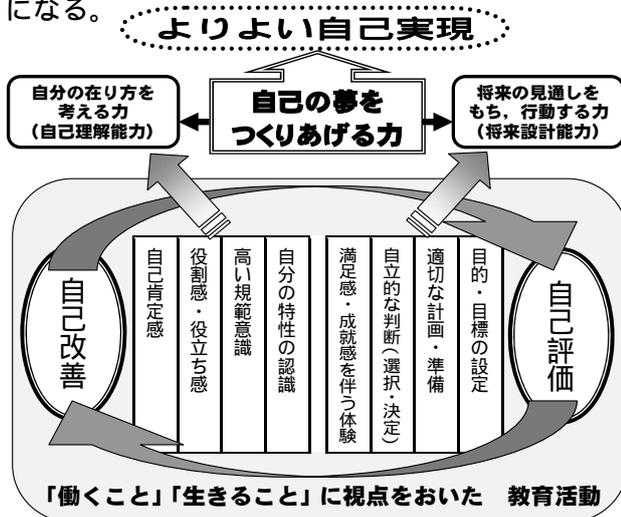


図1 「自己の夢をつくりあげる力」をはぐくむ要素

第2節 生き方探究教育を実践するためには

生き方探究教育を各教科等の中で実践していくためには、「めざす子どもの姿」を明らかにする必要があると考え、保育所・幼稚園から高等学校までのキャリア発達課題(例)の一覧表を作成した。また、各教科等と「5領域17の力」との関連がわかる、小学校1~6学年の学習内容関連表(例)を作成した。これらを基に、既存の教育活動を見直し、展開していくことが必要である。

第2章 体験的な学習を生かした生き方探究教育

第1節 「共生と自立」の視点に立った

体験的な学習とは

体験的な学習は、子ども自身が体全体を使って学んだことが、生活や社会や自然と結びついていることに気づき、主体的に学ぶ能力を身につけ、学ぶことの楽しさや成就感を体感することができる学習方法である。体験的な学習を通して、『共生』の観点である協同学習や、『自立』の観点である問題解決学習を進め、各教科等のねらいに迫ることが大切である。そこで、以下のポイントに留意して、体験的な学習を組み立てることが必要になる。

- 発達段階に応じた取組の設定
- 子ども主体の場の設定
- 協同的な学びの場の設定
- 活動を言語化する場の設定
- 多様な評価をする場の設定

第2節 体験的な学習を

有意義なものにするためには

体験的な学習は、子ども一人一人が身につけた力をこれからの学習や生活に生かしたり、今の自分の在り方を見つめ、将来の生き方を考えたりする上で、大きな役割を果たす。そこで、学習計画の中における体験的な学習のねらいを明確にし、学習指導案上に、つけたい力と体験的な学習の事前・事後学習での指導ポイントや具体的な支援を明記することにした。

また、個に対する働きかけとして、子ども同士によるアドバイスや励まし、指導者による指導・支援といった相談活動を行う場を設けたり、振り返りカードを活用した自己評価、それを生かした目標設定といった評価活動を工夫したりした。

第3章 小学校生き方探究教育の実践

第1節 第2学年「生活科」

～イベント企画体験～

『みんなでつくろうフェスティバル』の単元では、見通しをもった計画を立てて実行していくために、自分たちで活動計画カレンダーを作成した。また、最後まで仕事をやり遂げようという責任感や誰かの役に立っているという自己有用感をもつために、“リーダー”といった役割分担をして準備を進めた。さらに、子どもが自己決定したり、お互いの良さや課題を相互評価したりするために、グループ活動の後に振り返り会議をもった。

このことにより、子どもは、友だちとの協同学習や、下級生・お世話になった方を招待する活動の中で、“人とのつながり”を意識し、主体的に学習に取り組むことができた。

第2節 第3学年「社会科」

～販売体験・買い物体験～

『わたしたちのくらしとはたらく人びと 1. 商店のはたらき』の単元では、スーパーマーケットなどの見学を通して店の特徴を知るだけでなく、販売に携わる人々の工夫、苦勞、やりがいなどについて実感することができるよう、商店での販売体験を行った。また、消費者の立場から買い物の仕方や工夫、願いについて考えることができるよう、買い物体験を行った。

このことにより、子どもは、自分たちの消費生活や地域の様々な仕事について理解することを通して、“社会とのつながり”を意識し、社会人として働くことやよりよく生きることを意味を、自分なりに考えることができた。

第3節 第5学年「総合的な学習の時間」

～お母さん体験・保育体験・救急救命体験～

『ライフ（生命の誕生）』の単元では、“いのち”の誕生やその尊さにかかわる話を聞いたり、実際に体験したりする活動を単元の中に三度組み入れた。また、体験を通して気づいたことや考えたことを踏まえ、自分を見つめ直し、自分の成長の記録や将来の夢・希望を自分史という形で書きまとめた。

このことにより、子どもは“いのちのつながり”を意識し、自分や他者の命がかけがえのないものであることを改めて感じ取ったり、家族や周りの人々に対する感謝の気持ちを抱いたり、将来の目標やあこがれをもち、これからの生き方を考えたりすることができた。

第4章 生き方探究教育のさらなる充実を求めて 第1節 研究の成果と課題

体験的な学習を取り入れた学習計画の工夫については、下記の成果が見られた。

仕事に目を向けることにより、働くことや生きることの意味を考えたり、自分の将来像を描いたりすることができるようになった。事前学習で体験の目的を明確にし、計画・準備の段階に十分な時間をかけることにより、一人一人が見通しをもち、意欲的に学習活動を進めることができるようになった。事後学習で活動を言語化することにより、一人一人が活動の意味や価値について考えたり、自分の能力や可能性に気づいたりすることができるようになった。

また、相談活動や評価活動などの個に対する働きかけの工夫については、下記の成果が見られた。

子ども自身が客観的に自分を見たり、自分に対する視野を広げたりすることができた。過去と現在の自分の変容を、子ども自身が実感することができるようになった。指導者が、子ども一人一人のキャリア発達を詳細に把握することができるようになった。

一方、体験的な学習を通して高まった能力や意欲を活用する場の設定の工夫や、キャリア発達の見取りの記録方法といった課題が残った。

第2節 今後の取組に向けて

各学校において、生き方探究教育を推進していくためには、次のような手順例が考えられる。

育てたい子ども像の明確化・生き方探究教育全体計画の作成
生き方探究教育推進委員会（仮称）の設置
校内（学年）研修の実施
生き方探究教育年間計画の作成
生き方探究教育の実践
生き方探究教育の評価と改善

また、「働くことや生きることを通して、自らの在り方や生き方を考える」という目的をもったポートフォリオである“キャリアノート”を作成することも提案した。子ども自身が自分の成長を振り返ったり、指導者がキャリア発達を見取り、支援したりする際に活用することは、子どものよりよい自己実現をめざす上で、効果があるからである。キャリア発達の履歴となる“キャリアノート”を、学年や校種の枠を超えてつないでいき、次の学年や将来に生かすことが望まれる。